

ヨハネによる福音書2章 「しるしの始まり」

1A 最初のしるし 1-12

1B 客として招かれたイエス 1-5

2B 主となられたイエス 6-11

3B カペナウム訪問 12

2A 最後のしるし 13-25

1B 宮清め 13-17

2B 三日目の甦り 18-22

2B 信者を信じないイエス 23-25

本文

ヨハネによる福音書2章を開いてください。いつもそうですが、聖書は元々は、章や節の区切りはありません。そして2章は、1章にあった話の続きです、「2:1 [それから三日目に](#)」とありますね。

1章において、使徒ヨハネは注意深く、いかに、イエス様のほうに人々が弟子としてついていったかを書き記しました。バプテスマのヨハネが、バプテスマを授けている時にエルサレムから祭司やレビ人たちが来て、あなたは誰ですか、と問いました。そのことがあって、29節、「その翌日」とあります。そこで、イエス様を見たバプテスマのヨハネは、この方こそ世の罪を取り除く神の子羊、と叫びました。そのことがあって35節、「[その翌日](#)」とあります。そこで、バプテスマのヨハネの弟子であったアンデレ、そしておそらくもう一人は使徒ヨハネでしたが、二人がイエス様に付いていきます。そして43節、「[その翌日](#)」とあります。イエス様がピリポに、わたしについてきなさいと言って、それからピリポがナタナエルに、イエス様のところに連れて行ったのです。ですから、数えますと四日経っています。そこで2章1節の、「[それから三日目に](#)」とあるのです。ですから、このカナの婚礼の奇跡は、バプテスマのヨハネの証言が始まってから七日目に起こった、ということです。

1A 最初のしるし 1-12

私たちは、七日目と言えば、神の天地創造の働きを思い出します。神が六日で天地を創造され、それを完成させ、七日目に休まれました。イエス様は、これからカナの婚礼の奇跡によって、単に水をぶどう酒に変えたことを手品であるかのようにお見せになったのではありません。ヨハネ伝は、「しるし」という言葉が何度となく出てきますが、それは確かに、これが神の栄光を指し示す奇跡であり、神からのものであるという確証なのだということです。イエス様は、ご自分にあつて確かに、人々の間に住まれ、万物を造られた神がおられることを示したかったのです。

そして、1章の最後は、ナタナエルとの会話になっていました。ナタナエルが、いちじく木の下でおそらくは祈っていたか、何かをしていたのですが、それをイエス様はまだ一度も会っていないのに、イエス様はそれを言い当てられました。それをもって、ナタナエルは、「1:49 あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」と言ったのですが、イエス様は、それで信じるのか、「それよりも大きなことを、あなたは見ることになります。」と言われました。実に、ヤコブが見たはしごの夢の、はしごになっているのを、あなたがたは見るようになります、と言われます。天における栄光が、地上に現れるようになります、ということです。わたしが、あなたがたの間に住んでいる、ことばであり、独り子としての栄光を見せるということです。

1B 客として招かれたイエス 1-5

1 それから三日目に、ガリラヤのカナでがあり、そこにイエスの母がいた。2 イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれていた。

バプテスマのヨハネがバプテスマを授けていた、ヨルダン川の向こう、東側のベタニヤのほうに、イエス様たちはいました。そこからガリラヤ地方に移動しました。そこで、イエス様の母マリアが、おそらく親戚関係か、友人関係にあった人たちの婚礼に招かれていた、というよりも、自分自身が主催する側にいたのだらうと思われます。場所は、カナです。カナは、マリアの住むナザレから 14^キ北にある町です。福音書は、父ヨセフの名はイエス様が生まれた時にしか出てこず、イエス様が成人してからは名が出てこないことから、すでに死んでいたと多くの人は考えています。

「婚礼」と聞く時、私たちの考えるもの以上に盛大であったことを知ってください。婚約をしてから、すぐに花婿も花嫁も、ずっと先にある婚礼のために用意をします。花婿の家で食事の用意をして、その父が号令を出し、それから花婿は行列をなして花嫁の家に向かいます。人々が角笛を吹き、シンバルを鳴らしたり、夜中であってもそのようにして向かいます。そして、花嫁は結婚式に衣装を着ながら寝ているところ起き上がって、彼女に伴う乙女たちは、灯皿に油をすぐに追加して、それで花婿の引き取りに応じます。これらは、イエス様がご自身の戻られることを弟子たちに話された時に、十人の乙女の喩えに出てきますね。そして、花婿の家で盛大に婚礼を行い、それはなんと七日間、続きます。

そして、イエス様は、この婚礼に招かれています。マリアの息子として、普通のユダヤ人として社会行事に参加されています。弟子たちも、ラビとその弟子との関係で招かれています。イエス様は、人として、ユダヤ人として生き、その間に生活しておられました。人々の間に住まわれた、ことばですから。日常の生活において、何かきわだった生活をしておられたのではありません。イエス様に付いていく者たちは、同じようにして日々の生活を生き、社会的義務を果たしながら普通に生活をしています。

3 ぶどう酒がなくなると、母はイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。4 すると、イエスは母に言われた。「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」

婚礼など祝において、ぶどう酒は、ユダヤ人にとっては喜びと楽しみの象徴です。聖書には、お酒について、その悪い効果も書いていますし、喜びと楽しみをもたらすものの二つを描いています。ここでは、喜びと楽しみをもたらすものとして、婚礼には欠かせないものです。ところが、その中でぶどう酒がなくなっていました。これは、ヤバイことです！花婿とその父は、大いに面目を失ってしまいます。招待された者たちは、贈り物を持ってきていますから、祝宴の時の食事は期待されていることです。ここでぶどう酒がないとなると、人間関係において深刻な亀裂が走ることは間違いなしです。時に、訴訟問題になることさえあったそうです。これが、マリアがイエスに向かって話した、「ぶどう酒がありません」の言葉の背景です。そして、マリアは母として息子に対して強く言ったことは間違いありません。ユダヤ人の間では、父だけでなく母の言うことに従うのも大事にされていました、箴言にある通りですし、またリベカがヤコブに対して、エサウのふりをしなさいと言いつけたところを思い出してください。

そこで、イエス様の返答が、非常に意味深なものとなっています。「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。」母マリアは、息子イエスに対して抱いていた感情があります。ルカによる福音書によれば、マリアはガブリエルから明確に、自分が、いと高き方の子を聖霊によってみごもることを告げられていました。そして、出産された後も、天からの御使いたちの軍勢を見た羊飼いたちの証言を聞きました。そして幼少のイエス様のところに、東方からの博士もいます。この方が確かに、神の子キリストであることしるしが与えられていました。しかし同時に彼女はイエスの母です。母としての肉のつながりがあり、イエス様が 12 歳の時にエルサレムで学者らと議論していたのを見て、息子にしかりつけています。ところがイエス様は、「ルカ 2:49 わたしが父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」と言われたのです。それで、「母はこれらのことをみな、心に留めておられた。」とあります。

天からの啓示が与えられていると同時に、マリアは、肉の母親として息子に対する思いが入り混じっており、それで、こんな感じの思いになっていたのではないか？と思われる。「あなたがキリストなのだから、ぶどう酒がなくなったのだから、何とかしてみなさい。」というものです。私たちは、誰かがよく出来る能力のある人を見たら、この人なら何でもできるみたいな思い過ごしをしていますね。キリストならばなおさらのこと、そういった甘い期待をかけていたのではないか？というものです。それに対して、イエス様は、「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。」と言われました。これは、女性に対する丁寧な呼び名です。ご自身が神の独り子であることについて、そこに肉の母が仲立ちになったり、介入するような問題ではないということです。

そしてイエス様は、「わたしの時はまだ来ていません。」と言われます。この言葉が、ヨハネ伝にて何度かでてきます。まだ来ていないとあるのですが、ついに 12 章 23 節に、「人の子が栄光を受ける時が来ました。」と言われるのです。これは、最後の週、イエス様がエルサレムにおられた時です。ですから、この時というのは、キリストとして私たちの罪のために死に、三日目に甦り、それから天に昇られる一連の時です。まさに、キリストとしてこのことを行われるために主は来られました。その時はまだ来ていないのだ、ということをマリアに対してイエス様は言われています。

5 母は給仕の者たちに言った。「あの方が言われることは、何でもしてください。」

マリアが、ここで一つ深い悟りを得ました。後に、イエス様が甦られてから、他の弟子たちと共に祈られている姿が使徒 1 章に出てきますが、その時にははっきりと、マリアはイエスご自身を主としてあがめていたでしょう。そこに至るまで、マリアは母でありながら、なおこの方を主としていく心の備えが必要でした。ここでも、息子でありながら、実は彼に主導権を渡さなければいけないことを悟ったのです。そこで 6 節以降、ぶどう酒がなくなったについては、母は出てこず、イエス様がすべて指図しておられる姿になるのです。

イエス様は、もちろん肉の母マリアを尊敬していました。けれども一義的に主は、父なる神の独り子です。その関係性の中で主は生きておられます。そしてこの方の名を信じた者たちも、その関係性の中で生きています。「1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」

2B 主となられたイエス 6-11

6 そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、石の水がめが六つ置いてあった。それぞれ、二あるいは三メートル入りのものであった。

モーセの律法の中に、水による洗いについての教えがあります。それでユダヤ人たちは、後年に、どのようにすればその洗いを行えば良いのかという解釈を始めました。それで、特定の儀式によってのみ、自分は清められると信じるようになりました。水を手の上からかけます。でも水が自分の腕に流れ落ちることのないように気をつけます。溜めた水ではなく、流水でなければいけません(マルコ 7:3 参照)。そして、土器ではなく、石であることも大事で、土器ですと、汚れが取れないとみなされ、汚れたら壊さないといけなことがレビ記に書いてあります。ですから、私たちが「食事の前には手洗いを」といふ衛生面の規則ではなく、儀式的なものです。今でも、正統派のユダヤ教徒の人たちはこれを行なっています。

そのようなユダヤ人のしきたりの中に、恵みとまことを満たすのがイエス様です。「1:17 律法は

モーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」ですから、この水がめが「六つ」置いて、あるとありますね。ここに暗喩があります。先に、カナの婚礼が、バプテスマのヨハネの証言から七日目だということを話しました。聖書では「七」が完全数として出てきます。それに一つ足りない「六」ですから、これは人間の数なのです。これは、イエス様が通りかかったときに、「葉が生い茂っているのに、実がない」というイチジクの木に似ています。宗教性は豊かにあるのですが、いのちがないのです。

そして、「メトレテス」は 40 ℓなので、80 ℓから 120 ℓの量が一つの水がめの大きさとなっています。相当の量ですが、それだけの招待された者たちがいたということ、そして、これからのイエス様のなされる御業が、いかに恵豊かさを表しているかを物語っています。

7 イエスは給仕の者たちに言われた。「水がめを水でいっぱいにしなさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。8 イエスは彼らに言われた。「さあ、それを汲んで、宴会の世話役のところを持って行きなさい。」彼らは持って行った。

水がめの縁までいっぱい満たせば、そこにさらにぶどう酒のエキスとか、何かを付け加える隙がなくなります。

9 宴会の世話役は、すでにぶどう酒になっていたその水を味見した。汲んだ給仕の者たちはそれがどこから来たのかを知っていたが、世話役は知らなかった。それで、花婿を呼んで、10 こう言った。「みな、初めに良いぶどう酒を出して、酔いが回ったところに悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒を今まで取っておきました。」

水がめに並々に入れた水が、ぶどう酒に変わりました！しかも良質のぶどう酒です。宴会の世話人の言葉は、ミクロ経済学が言うところの「限界効用逓減の法則」です。飲めば飲むほど、その満足度はだんだん減るので、そう呼びます。そのことを知っているユダヤ人は、祝宴の時に満足度が得られる一杯目、二杯目の時は良質のぶどう酒を、それ以降は質の悪いのを出すのですが、最後まで良いものを取って置きましたね、と喜んだのです。限界効用逓減の法則に反して良質のものを出した。ここに、イエス様の満ち満ちた豊かさが現れています(1:16)。

11 イエスはこれを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

これが、「最初のしるし」でした。ヨハネはずっと後に第二のしるしを書き、合計七つのしるしを福音書全体に書きし記しています。水をぶどう酒に変えるのは、創造の働きがなければいけません。水をいくらどのように加工しても、ぶどう酒にはなりません。他の元素成分が必要です。つまり、無

から有の創造が必要であり、無から有の創造は神のみにしかできないのです。だから、「ご自分の栄光」としての、しるしなのです。「1:14 私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」です。

そして、このことにとって「弟子たちはイエスを信じた」とあります。ナタナエルに対して、人の子の上を御使いが昇り降りするのを見ると言われたのですが、まさに、そのことが今、ここで起こりました。この方が神から来られた方だということを見て、信じました。これが弟子になることの恵みです。イエスが主であるから、ついていくというところで、その心に対して主がご自分の栄光を見せられます。ほかの人たちには隠されます。あるゴスペルの歌い手がこう言いました。「神様の愛は、心を開いた人にしか分からない。」神様は、無理やり、私たちの口をこじ開けるようにしてご自分のことを示そうとは思われません。求める心、開いた心があったからこそ、主はまず弟子たちにご自分のことを示されたのです。

3B カペナウム訪問 12

12 その後イエスは、母と弟たち、そして弟子たちとともにカペナウムに下って行き、長い日数ではなかったが、そこに滞在された。

ここから、ヨハネが書き記していたこと、1章から2章のカナの婚礼に至るまでの出来事が、他の福音書のイエス様の宣教の前の、非常に初期であることが分かります。ナザレに住んでおられたイエス様が、カペナウムに拠点を動き、そこで働きをしている中で、例えば取税人のマタイを呼ばれて、ついてくるように言われました。

この時は、まだ肉の家族と共に行動しておられたことが分かります。イエス、母も、そして弟たちも一緒に行き、そして短期間でありましたがカペナウムに滞在しました。シモン・ペテロの家に滞在したのかもしれませんが。そのような家族と弟子たちが入り混じっていたところから、イエス様はイエス様だけの共同体を作っていかれませんでした。そして宣教の働きが著しく広がり、人々がイエス様のところに群がり、そこで母や弟たちが、このままではイエスがおかしくなってしまうのではないか？と思い、引き取りに来た場面が他の福音書にありますね。けれどもイエス様は、「だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」と言われて、神のことばを聞いて、御心を行っている者たちが自分の家族であると明言されました(マルコ 3:31-35)。

2A 最後のしるし 13-25

1B 宮清め 13-17

13 さて、ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。

ヨハネの福音書の全体を読んだ方は気づいたかもしれませんが、イエス様の公生涯を描くのに、

共観福音書とは異なり、エルサレムにイエス様が行かれたことをヨハネは書いています。ユダヤ人は、世界に散らばっていても、成年男子は年に三度、祭りに集うことが律法で定められています。なので、使徒の働きで五旬節の時に、世界の各地方から巡礼に来ていたユダヤ人たちが、自分たちの地方の言葉で弟子たちが神を賛美しているのを見て、驚いたのです。イエス様はユダヤ人ですから、祭りにはエルサレムに上られていたのです。

そして祭りは「[過越の祭り](#)」です。イエス様が十字架に付けられる時も過越の祭りの時で、エルサレムに入られた時に宮清めを行われましたが、ヨハネ 2 章にあるこの宮清めはそこと違います。今、話しましたように、イエス様の公生涯においてかなり初期のことをヨハネはまだ描いているからです。過越の祭りは、ユダヤ人が祝っている祭りの中で最も大切な祭りです。これは、紀元前 1445 年辺りに、イスラエルがエジプトで奴隷状態であった所から、神がイスラエルを救い出し、ご自分の民としてくださった大きな出来事を記念としています。そこで、イスラエルの人々には、「家族で一頭、子羊をほふりなさい。その血を家の戸の門柱と鴨居につけなさい。その肉を食べなさい。死をもたらず天使がエジプト中を回るが、家に血がついているのを見たら、そこを通り越す。」と約束してくださいました。ここから過ぎ越す、災いが過ぎ越す、ということで、「過越の祭り」と呼ばれています。なので、ベツレヘムで育てられた子羊が、この時にはたくさん屠られます。イエス様が、「1:29 [世の罪を取り除く、神の子羊](#)」とバプテスマのヨハネが呼んだことを思い出してください。

14 [そして、宮の中で、牛や羊や鳩を売っている者たちと、座って両替をしている者たちを見て、15 細縄でむちを作って、羊も牛もみな宮から追い出し、両替人の金を散らして、その台を倒し、16 鳩を売っている者たちに言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家にしてはならない。」](#)

「宮」とありますが、エルサレムの神殿には「外庭」と「内庭」があります。ここは外庭の部分です。他の日本語訳の聖書(共同訳)ですと「境内」と訳されています。日本人にはこれなら理解しやすいかと思います。ここで商売のようなことが行なわれていたのです。

「[牛や羊や鳩](#)」が売られていたとありますが、神は、私たちの罪を赦すために、血が流されなければならないことを教えられました。罪を犯す者は死ななければならない、血は命を表しているからです。そのことを、旧約聖書ではレビ記を中心にして細かく教えています。そして神は、それぞれの経済的な力に応じて、牛、羊、そして鳩と分けておられます。牛は一番高価な動物で、鳩は牛や羊が買えない人の為のものです。

そして罪のない存在が罪を代わりに負うのですから、その牛や羊にはしみや傷のないものでなければいけません。完全な神が受け取るのは、欠陥のない、いけにえのみです。なので、罪を犯していないのに、死なれたキリストの意味がここに表れています。このいけにえの制度、犠

牲の制度はとても大切なものです。イスラエルの人々は、神殿にまで自分の牛や羊を連れて行き、そこで神を礼拝します。ところが、その神殿を管理している人々が商売を始めました。祭司が、イスラエル人が連れてきた家畜を調べます。しみや傷、欠陥を見つけたら、「これは神殿に持つて入ることはできない。」と言います。そして、「すでに認証済みの家畜がある。それを購入しなさい。」と言います。その家畜が認証済みだからということで、べらぼうに高いのです！その利益を神殿の管理者らが自分たちのものにしていただけです。

そして「両替人」とあります。再び、旧約聖書のレビ記の所に、神にささげるお金として「シェケル」という貨幣単位が定められていることが書かれています(27章)。ところが、彼らはローマ時代に生きていました。ローマの貨幣には皇帝カエザルの顔が刻み込まれており、ローマの人々は彼を神とあがめていましたから、そのような偶像、汚れたものは使えないと反発していたのです。それで神殿にささげるものは、神殿用のシェケルがあったのです。ところがこれも神殿管理者は利用しました。両替する時にべらぼうな為替手数料を取ったのです。これで一儲け。つまり、神を礼拝したいという心を利用して金儲けするという汚いことを彼らは行っていました。

そして、ヨハネの福音書を独特にしているのは、午前礼拝でお話ししました、「神とご自身を一つにされている」ということなのです。畏れ多き神を、「わたしの父」と呼び、まるで神殿が自分の所有している宮のようにみなしておられるからです。

17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が私を食い尽くす」と書いてあるのを思い起こした。

これは、詩篇 69 篇 9 節にある言葉です。神の家を思う熱心のゆえに、ダビデが嘲りを受けていることを嘆いているところですが、イエス様が神の家に対する熱い思いがあるゆえに、そのように清めを行われたことが分かります。旧約の時代には、バビロンによってエルサレムの神殿が滅ぼされる直前に出てきた預言者、エレミヤも、その嘆きを預言しました。また同時期にバビロンに捕え移されていたエゼキエルも、幻の中で神殿が汚されていることを見ました。そして預言者マラキが、バプテスマのヨハネについての預言を語った直後に、「3:1 あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。」とあり、主の日は精錬する火のように来ることが書かれています。その手前、預言者ゼカリヤも、その預言の最後は終わりの日、神の国における神殿について語り、「その日、万軍の主の宮にはもう商人がいなくなる。」とあります。

2B 三日目の甦り 18-22

18 すると、ユダヤ人たちがイエスに対して言った。「こんなことをするからには、どんなしるしを見せてくれるのか。」19 イエスは彼らに答えられた。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」20 そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかった。あなたはそれを三日でよみがえらせるのか。」

午前礼拝でお話しましたように、ユダヤ人はしるしを求めていました。それだけの権威を主張するなら、神から来たことを示すしるしを見せなさいということです。イエス様は、これからお見せになる数々の奇跡を言及されるのではなく、もうこれ以上ない、究極のしるしを前もって語られました。それが、ご自身の復活です。しかし、聞く耳のある者だけが聞けるように、耳の塞がれている者には悟ることができないように、身体を「神殿」と言われました。神殿はものすごい建物で、世界の七不思議に入らなかったのが不思議なぐらいです。ヘロデ大王が紀元前 19 年にこの神殿を建て始めました。そして今 46 年経っています。だから紀元 27 年頃です。そして完成したのは紀元 63 年だと言われています。

このイエス様の発言が、後に彼らがイエス様を死刑に定めるために裁判を行った時の告発の根拠の一つとなりました。「マル 14:57-58 すると、何人かが立ち上がり、こう言って、イエスに不利な偽証をした。『わたしは人の手で造られたこの神殿を壊し、人の手で造られたのではない別の神殿を三日で建てる』とこの人が言うのを、私たちは聞きました。』使徒の働きでも、ステパノが告発された時に、やはり、このことをナザレ人イエスが言っていたと告発していたのを読みます(6:14)。

21 しかし、イエスはご自分のからだという神殿について語られたのであった。22 それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばを信じた。

弟子たちが、自分たちが聞いていたイエス様の言葉や行いについて、その時は悟ることができなかったことが多くありました。後になって悟ったのですが、それはイエスご自身が甦られた後であります。私たちは、ヨハネの前、ルカによる福音書を読んだ時にイエス様が、弟子たちの鈍い心を開いたことを読みましたね。「ルカ 24:45-46 それからイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、』

このようにして、2 章において、使徒ヨハネは、最初のしるしと、最後のしるしのどちらも連続して書き記しました。これは大事なことです。初めと終わりを抑えておけば、神が何を心に留めてご計画を立てておられるかがわかります。飛行機に乗る時に、その飛行ルートを書き記すよりも、出発地と到着地を知ることが最も大事なように、初めと終わりはとても大切です。初めは、水をぶどう酒に変えられるところから、「創造の働き」を見ました。創造、無から有を生み出す創造です。そして最後のしるしは、「復活の働き」です。罪によって人が滅び、また被造物も滅びに定められましたが、古きものは過ぎ去ります。しかし、神は死んでいるものを甦らせる働きを行われます。これが、神の栄光の現れです。これを一つにまとめると、「いのち」でしょう。いのちを神は与え、人の反逆によって失われてしまったものを、神がよみがえらせることによって、新たな命を与えられます。私たちは神によって形造られ、罪によって死んでいたけれども、御霊によって新たに生まれます。

そして、この滅ぶべき体も、生き返るのです。

2B 信者を信じないイエス 23-25

23 過越の祭りの祝いの間、イエスがエルサレムにおられたとき、多くの人々がイエスの行われたしるしを見て、その名を信じた。24 しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。すべての人を知っていたので、25 人についてだれの証言も必要とされなかったからである。イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである。

エルサレムの過越の祭りの時、イエス様は、宮清めを行われたことで、ユダヤ人にしるしを求められたので、確かにご自身がその権威があることを、しるしを行われることによって示されました。それによって、人々はイエスの名を信じましたが、興味深いことに、イエス様のほうは信じなかったのです。「お任せにならなかった」という言葉は、「信じなかった」と訳すことができます。この違いは何か？「人のうちに何があるかを知っておられた」ということですね。信じるといっても、それが実質のある信仰かというところではなく、表面的なものだったのです。見たら信じる、というものであり、見なくとも信じる、または、主の言葉だけで信じるというまでの信頼がなかったということです。主に、自分自身を完全にお任せになっていなかった、ということです。山上の説教の最後にも、そのような信仰について、イエス様は警鐘を鳴らしていましたね。「マタ 7:21 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」私たちが、信じると言っていることと、本当に信じているということは違うのだ、ということを知る必要があるでしょう。そして、イエス様は心を見られます。

今回は、この中で夜に一人、イエス様のところに来たユダヤ人指導者の話が出てきます。彼もしるしを見て、イエスの名を信じましたが、しかしイエス様はまだ信じていないというか、その言っていることにご自身をお任せにならなかった話になっています。